

クモ女に 狂っ てな お。

Polbuckle

どれくらい歩いただろう。

私は全てを失った。

いや、そもそも私には何もなかったのかもしれない。

自暴自棄になった私は

気付いたら名前も知らない山の

深い深いところに潜り込んでいた。

もう、戻ることもできないな。

こんなときまで気取っている自分に苦笑いした。

そして間もなくソレに出会った。



アアアア

アアアア

その異形からそう思ったのか
それとも動物的感だろうか
ソレとは意思疎通など決して出来ないと悟った。



その艶やかな身体に欲情した私は
いてもたってもいられなくなり
全てを脱ぎ捨てていた。

私は、何を思ったのか
いきり立った男性器をツレに突き付けていた。

レレレ

ゴッゴッ

ゴッゴッ

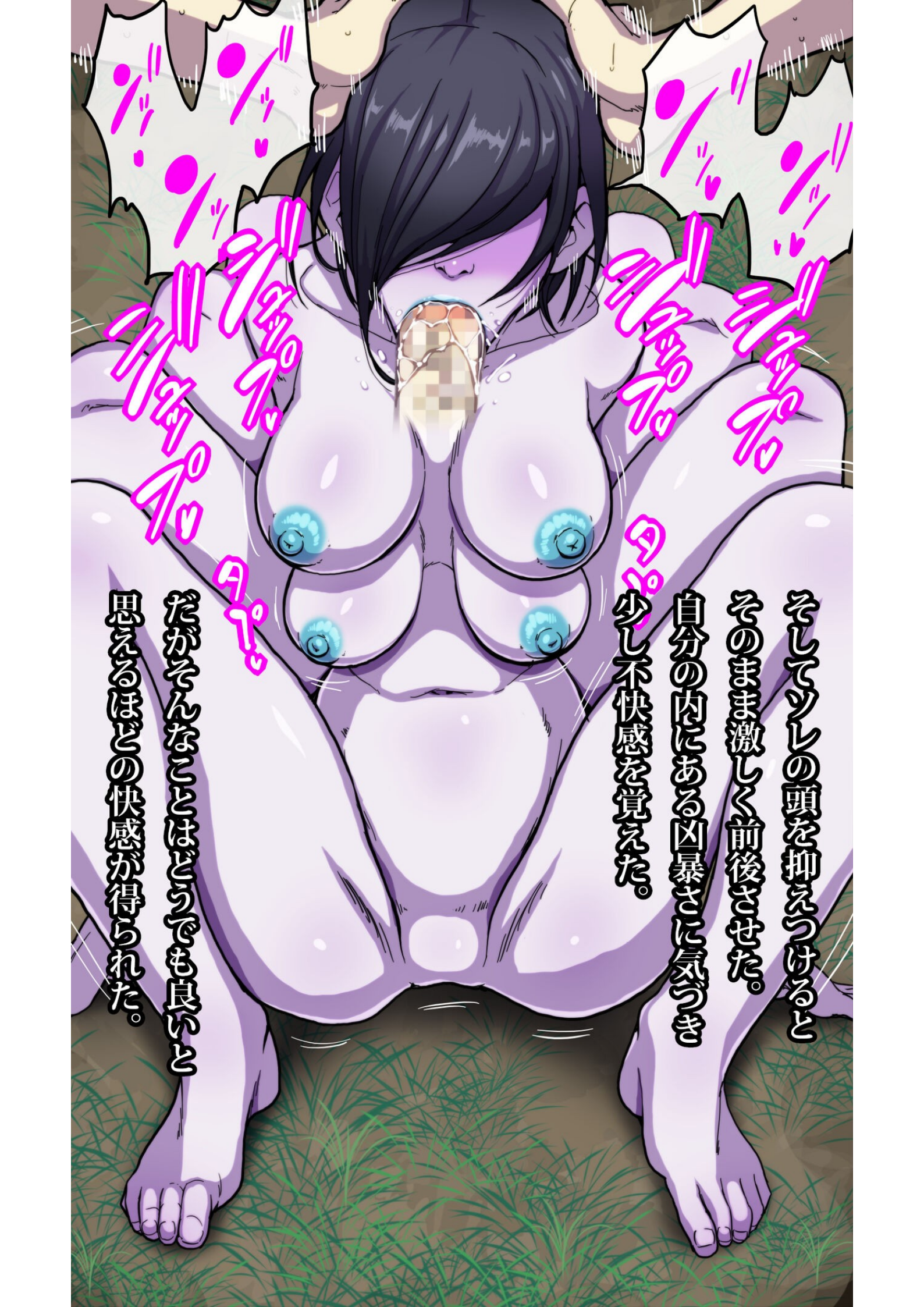


それは嬉しそうにすると
青い舌を私の男性器に這わせた。



もう私は止まらなかった。
男性器をおもむろにソレの口に挿し込む。



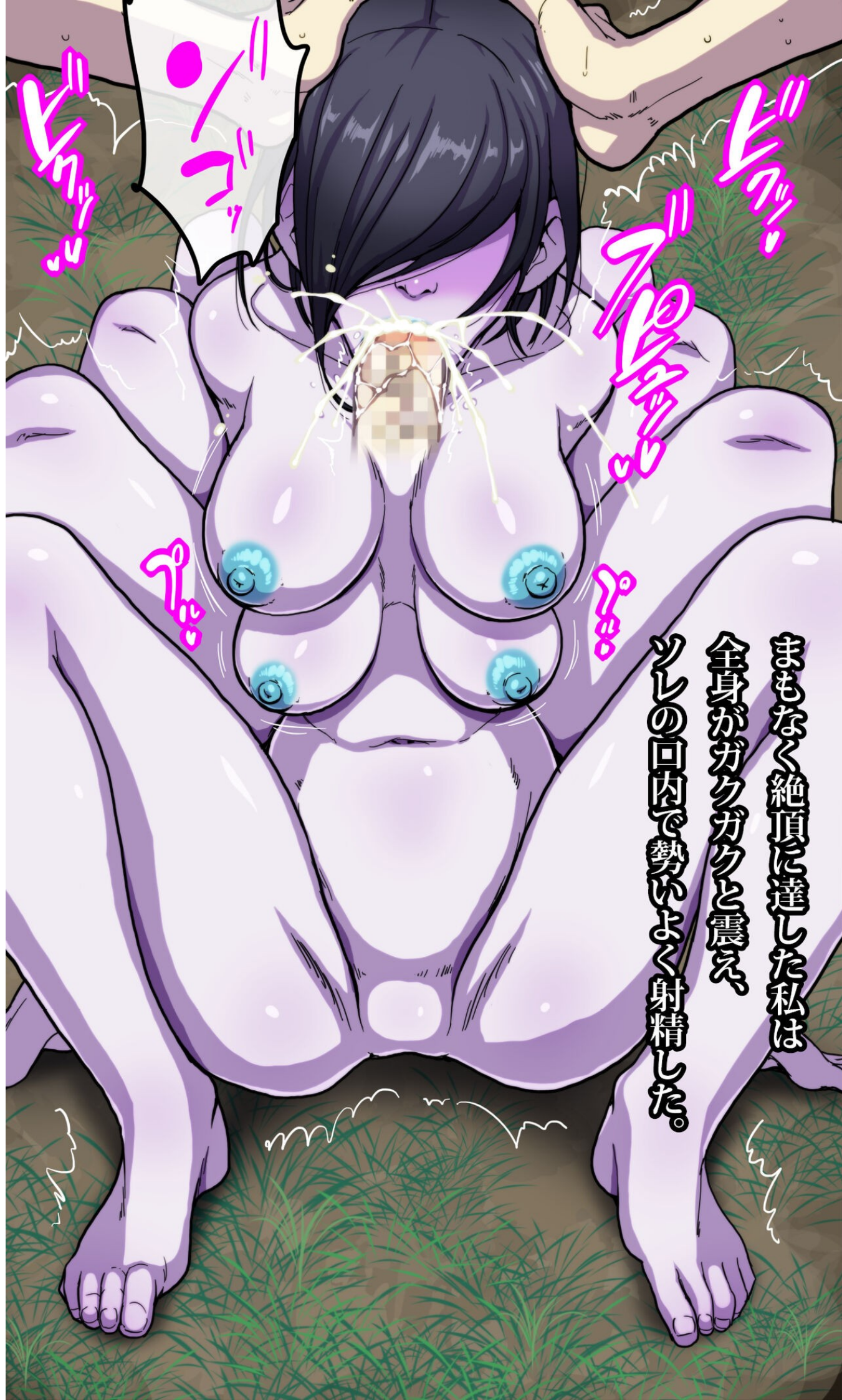


そしてツレの頭を抑えつけると
そのまま激しく前後させた。

自分の内にある凶暴さに気づき
少し不快感を覚えた。

だがそんなことはどうでも良ら
思えるほどの快感が得られた。

まもなく絶頂に達した私は
全身がガクガクと震え、
ソレの口内で勢いよく射精した。





恐ろしいほどに快感だった。
そしてソレもまた満足気だった。

パァァ

いっ

ソレは、ぱたりと倒れ込み

私に全てをさらけ出すようだった。ア%

まるで、私に対して

『自由に犯して良いぞ』と言っているようだった。

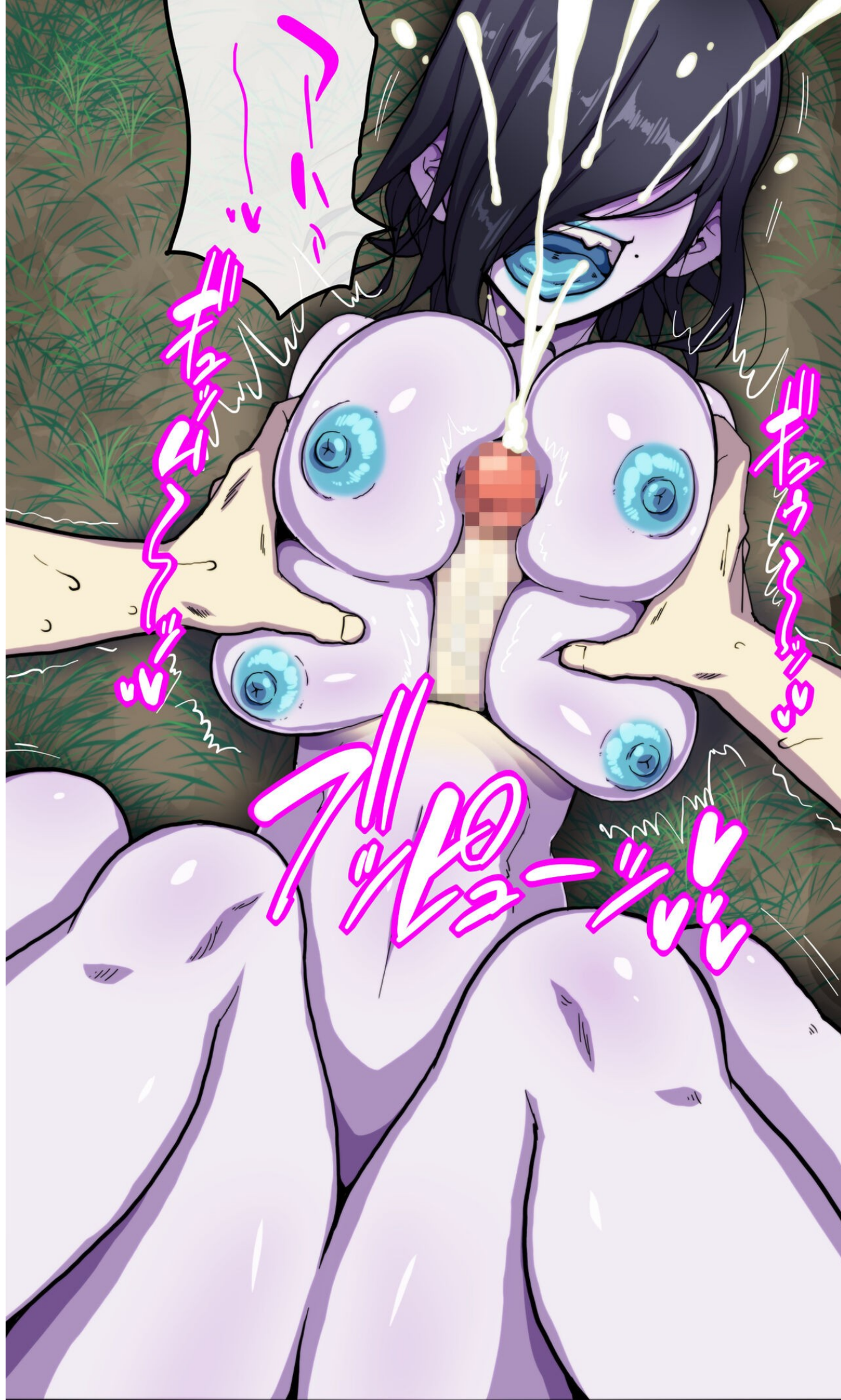


私が興味をもったのは、四つの乳房だった。

それを抑えつけ
みっちりとした乳房の間に
男性器を挟み込んだ。









やりたい放題している私に対して

なおもこちらを向いて股を開いてきた。

こんなバケモノでも人と同じモノが付いていた。

彼女は私を欲しているのだ。

断るほうが

失礼なのだ。

ニィー

ア
ッ
ッ
ッ

ム%

ム%



『私はまだまだいけるぞ』

ムスコがそう言っているかのように

激しく脈打つのを感じた。

その先端を彼女に
押し付ける。

クッ！

クッ！

クッ！

ドゥン！

あまりの興奮、あるいは背徳感だろうか、
それらが私の脳を刺激し、
童貞のように射精しそうになる。

ずぷりと挿入^{はい}る。いやらしい肉が締め付ける。
その快感に思わず果てそうになるのをこらえた。
ソレもビクリと反応した。
こいつはいやらしい。
メスだと思った。

ビクッ♡♡♡

クッ♡♡

クッ♡♡♡♡♡



私は一心不乱に腰を前後させた。







ソレの陰部から溢れ出す白濁液を見ながら思った。
もう自分は戻れないところに来てしまったと。



私は何度だって勃起した。

オマエがその気なら私だってやってやる。

ハッ
ハッ

ビュッ
ビュッ

ギョッ

ハッ
ハッ





ほらっつ、喘げっ。

この変体の化け物めっ。
人間様をなめるなっ。





どうだ、気持ち良かっただろ。
こうなりゃとどろきやうまへんてやる。



まだまだ足りないってツラをしてやがる。
そんなコイツにますます欲情した。
私は心も身体もケダモノのように
なっていくのを感じた。

く
ヒヒ...♡

ガ
シッ

ヒ
キ...

ヒ
キ...

ガ
シッ













ニタァー♡

ポ
ル
ポ
ル♡

ズ
ン
ズ
ン♡

もう私は止まらなかった。

走り出した列車は決して止められない。

私の精巣が精子をつくり続ける限り

射精し続けようとするだろう。













面白いものだ。

次第に彼女に対して

情のようなものが湧いてくる。

こんなにも何度も何度も

受け入れてもらえたことなど

無かったからだ。

ハァ〜♡

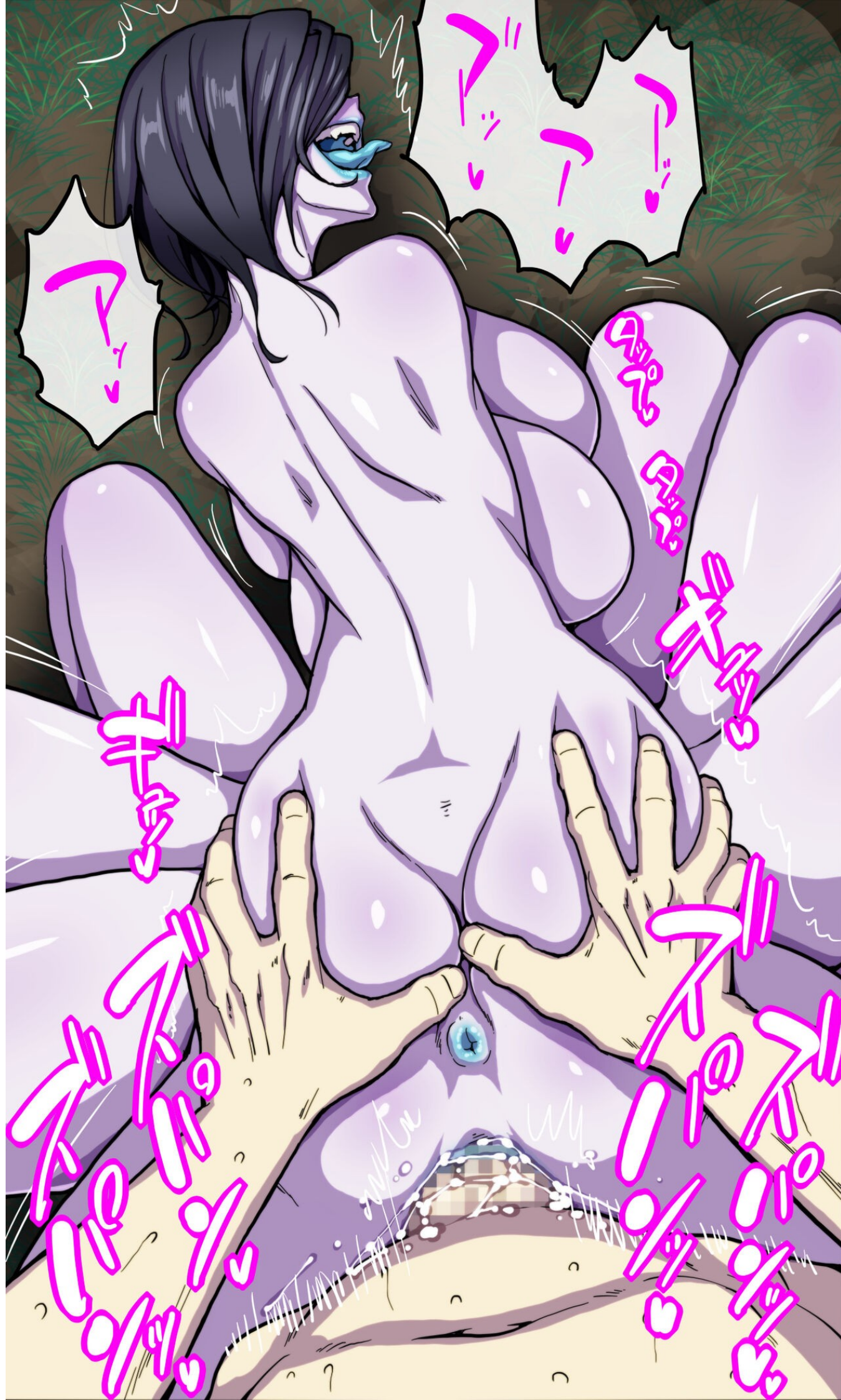
ハァ〜♡

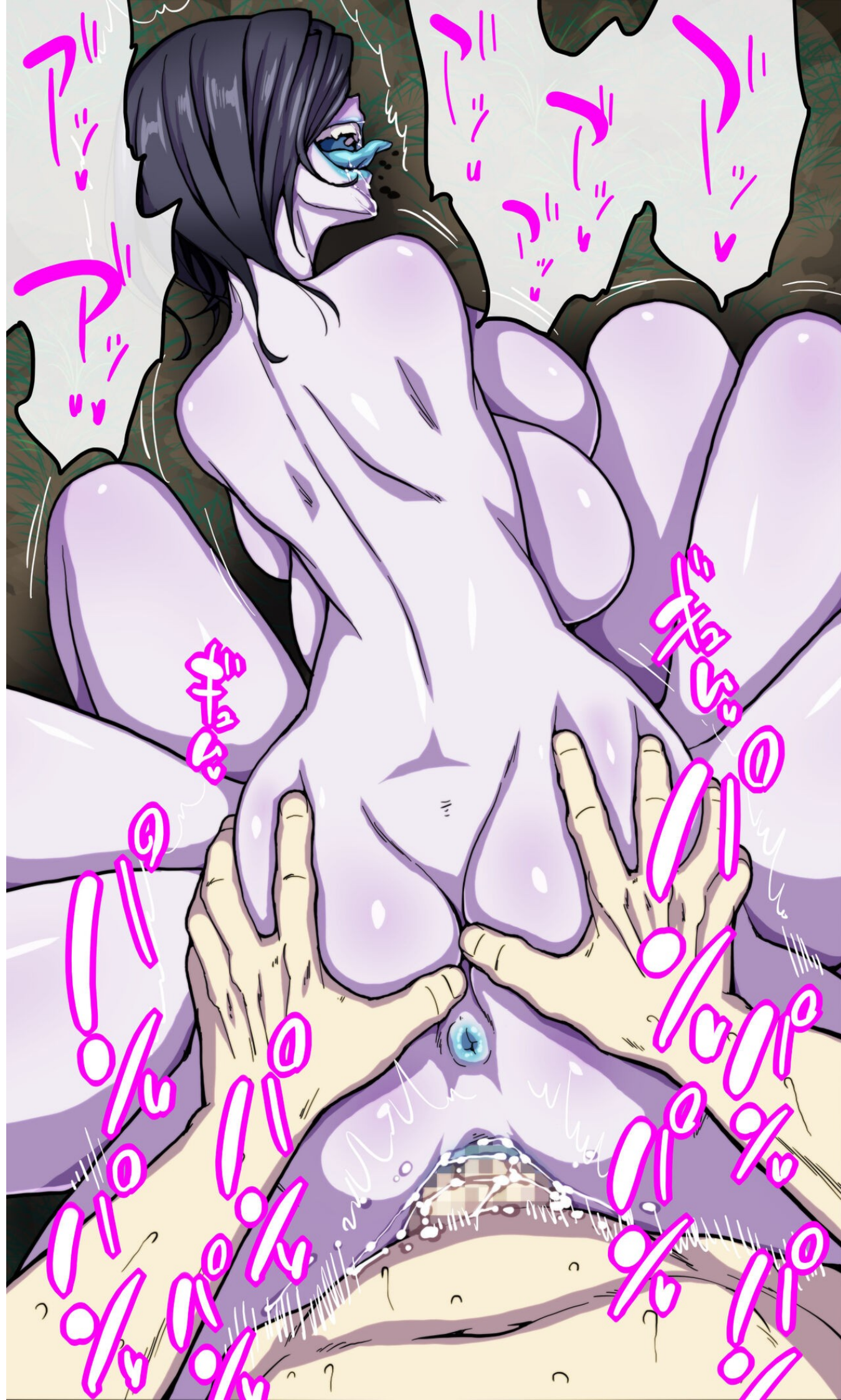


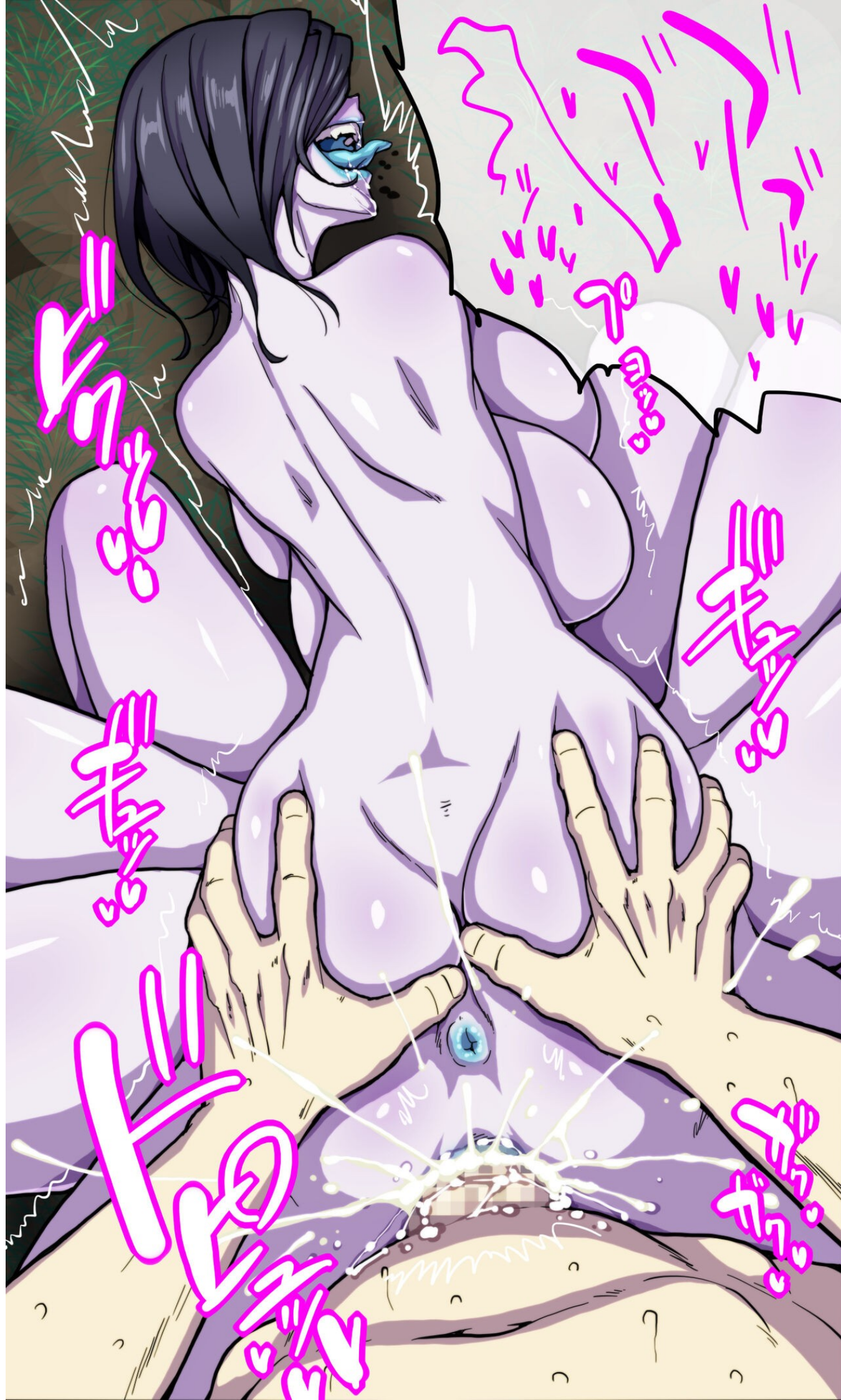
私も彼女に応えようと
往復運動がより激しくなる。













何度も身体を重ねていくうちに、
私は彼女に特別な感情を抱いていた。
人間とは得てしてそういうものだ。
決して私が異常なのではない。

レレレっ♡

グワッ♡

グワッ♡
グワッ♡
グワッ♡

グワッ♡

彼女だってこんなにも悦んでる。
異種間に何かが芽生えたとしても
決して不思議ではないのだ。









もう限界だ……。

私がここで力尽きても

彼女は許してくれるだろうか……。



ぐったりとした私を

休ませてくれるような優しさなど

彼女にはなかった。

そして私の身体も彼女の期待に

応えてしまう。

レレレ〜

タタ

レレレレレ

グググ

ハッ
ハッ
ハッ



ああ、なんて罪深いのだろうか。

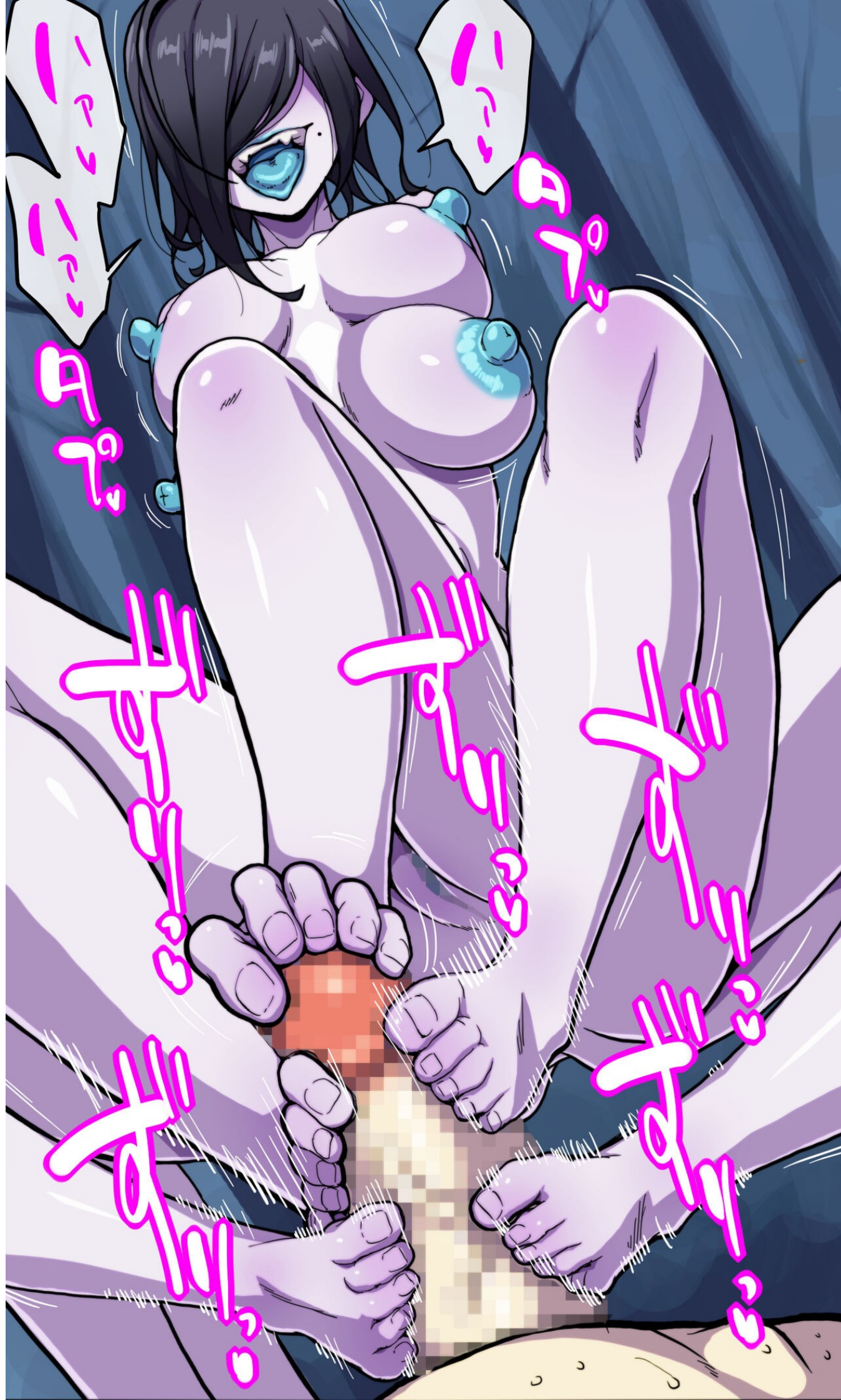
私の精巣が命をすり減らして

精子を製造している。

もう既に限界など

通り越しているというのに。







どうだ、お望み通り吐き出してやったぞ。
彼女の満足気な表情がなんとも嬉しい。



ハー……♡

この期に及んで

まだ私を欲するのか……。

もう身体もまともに動かない。

それでも雄々しくそそり立つ愚息に

怒りすら覚えた。

クワッ♡

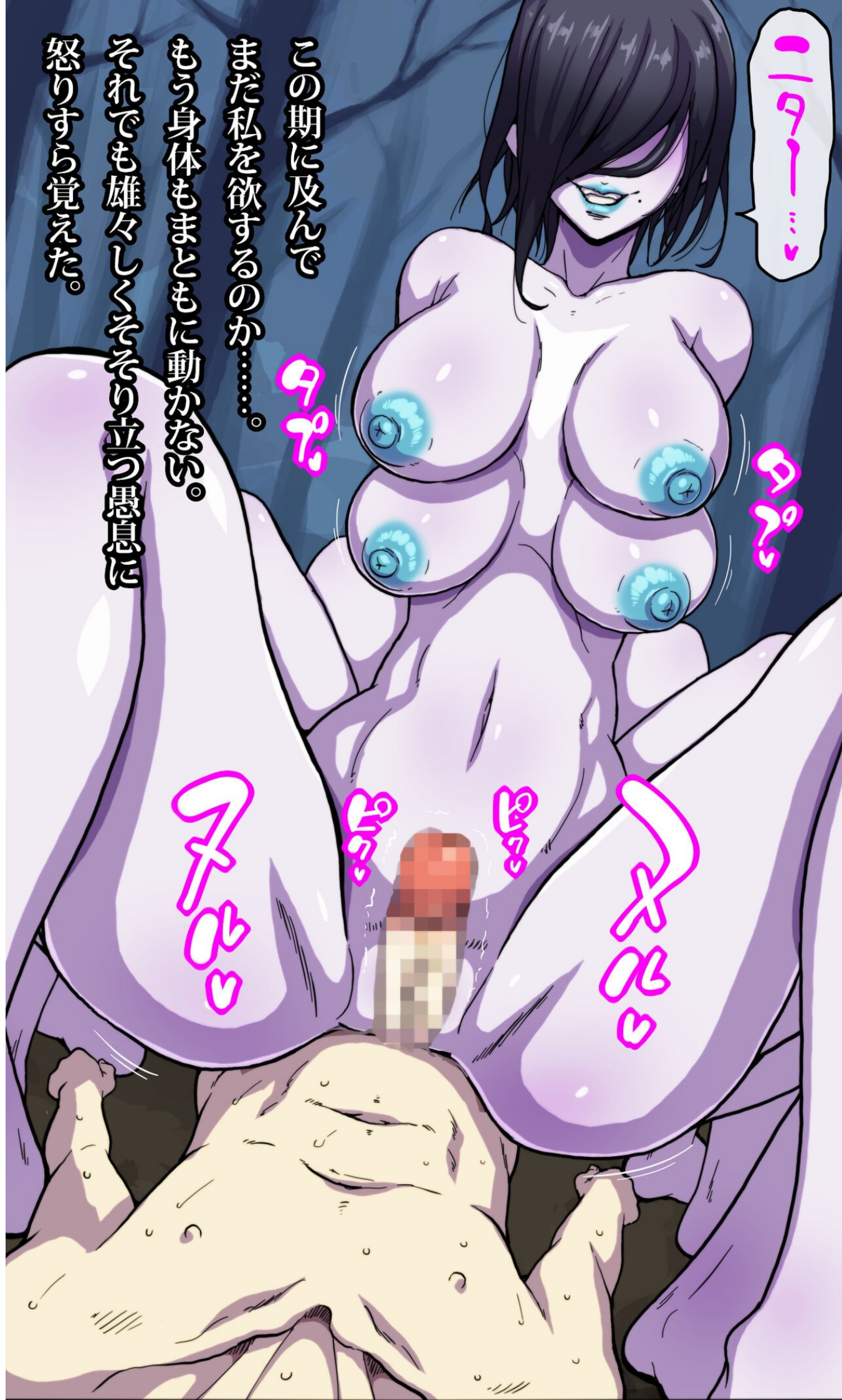
クワッ♡

フル♡

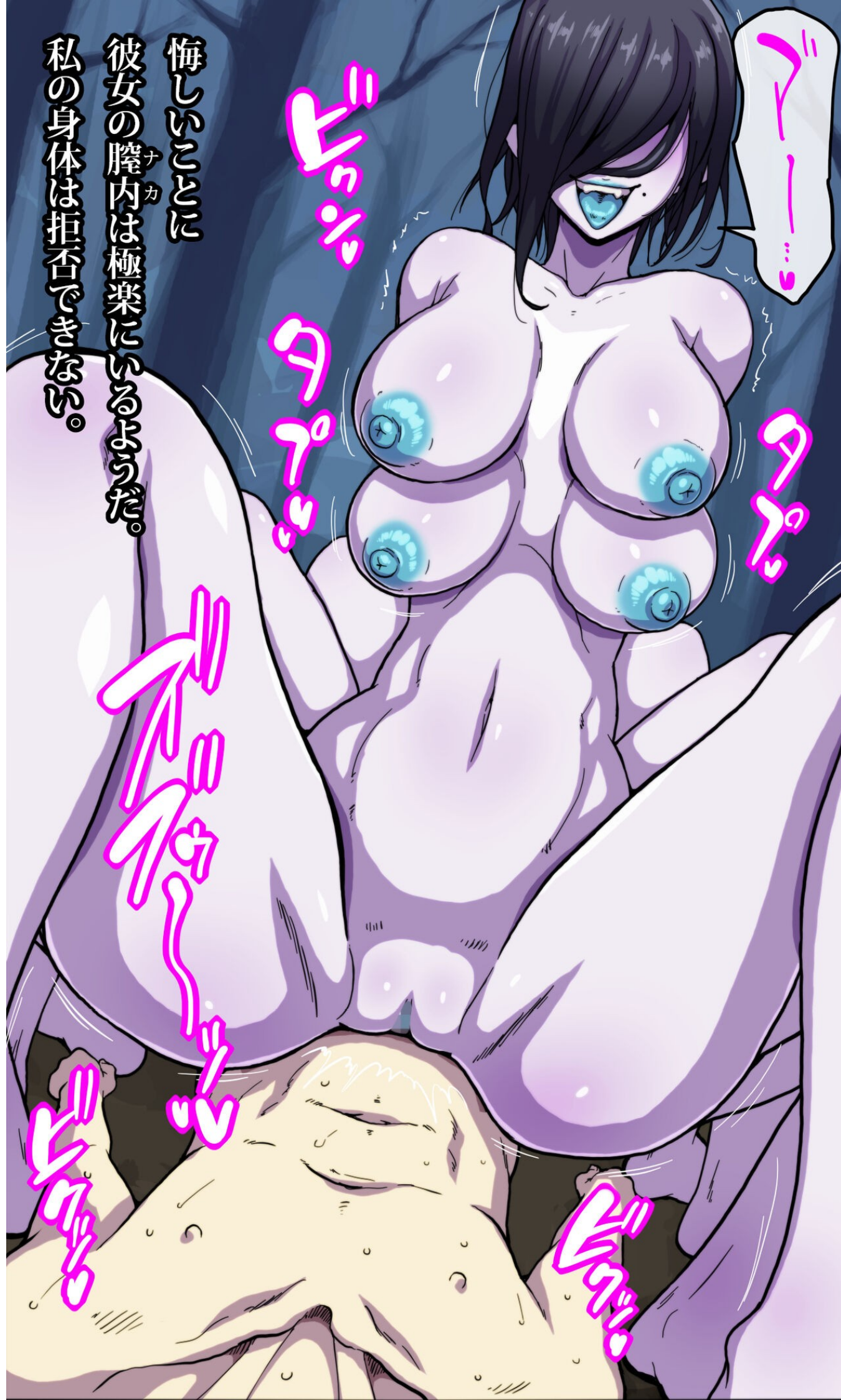
ドクッ♡

ドクッ♡

フル♡



悔しいことに
彼女の膣内^{ナカ}は極楽にいるようだ。
私の身体は拒否できない。





あらあらまあまあ。これ。

あら

タタタ

タタタ

タタタ

タタタ

タタタ





最後のひと搾りを終わると意識が遠のくのを感じた。
このまま目を覚ますことが無くとも
今日のこの思い出が、私を安らかに逝かせてくれるだろう……。



ふと目を覚ますと、私は全裸で横たわっていた。

……どれくらい歩いただろう。

私は狂ってしまったようだ。

クモ女彼女が頭から離れない。

そして私は、クモ女彼女に狂ってなお、

クモ女彼女を探しに山の奥深くへと潜っていく。

面白いものだ、死を望んで彷徨っていたのに

彼女を再び抱くまで死にたくないと思っている。

いや、それだけのためにただひたすら山を徘徊する私は、

すでに死人しびとと変わらないのかもしれない。

おわり